

看護理論の発展経過と現状および展望

Nursing Theory — History, Present State and Prospective

城ヶ端 初子¹⁾*, 大川 眞紀子²⁾, 井上 美代江²⁾

Hatsuko Jougahana, Makiko Okawa, Miyoe Inoue

キーワード 看護理論, 歴史, 発展過程, 展望

Key Words nursing theory, history of Nursing theory, present state, prospective

抄 録

看護理論は、看護学の基礎であり、看護実践と表裏一体をなす重要なものである。現在、看護理論の定義は様々であるが、看護に対する見方や考え方を体系的に理論づけたものであるといえる。

この看護理論の始まりは、英国で活躍した Nightingale の看護思想である。その後、看護理論は1920年代の米国で関心が高まり、1960年代で理論開発が進み、多くの看護理論が発表され活用されるようになった。一方、日本では、1960年代に米国で開発された看護理論が翻訳され活用されてきたが、1970年代に薄井坦子氏による「科学的看護論」が発表され、臨床や教育の領域で活用されてきた。

このように発展してきた看護理論は、看護の臨床、教育、研究領域で用いられ今日に至っている。これからも看護理論の必要性の高まりは、続くものと思われるが、今後は日本文化、生活様式、価値観などに根ざした看護理論の開発や現在用いている理論の修正などしながら看護理論の活用が促進されていくものと考えている。

I. はじめに

看護は長い歴史をもつものの、科学的な継承がなされないままに歩んできた。しかし、Nightingale によって、近代看護が創設され科学的な理論に裏づけられた実践がなされ、今日では看護師は専門職であり、看護は実践の科学であるといわれている。

看護学が従来からの学問と異なるのは「人間の健康問題とそれらに対する反応に関する現象を予測し、それを制御し規定することにある」(Wooldridge, P, J, 他1983/南監訳, 1990)といわれている。すなわち看護学は人間の健康や安寧を対象としており、実践を通して実現していくものである。

このように看護は科学であり、アートであるという共通理解の上で実践の科学としての看護学を確立させるために看護理論は必要不可欠なものであると我々は考えている。また、看護理論は、その時代の人々の要請やニーズなど社会情勢からの影響を受けながら、今日まで開発され、活用されてきた。こうして看護理論は現在、臨床をはじめ

教育・研究領域で活用され成果をあげつつある。

本稿では、看護理論の祖といわれる Nightingale をはじめ、その後米国で開発され、発展した看護理論を中心に日本・英国で開発された看護理論を加え、看護理論の概要や発展過程と動向をたどり、現在の状況および将来の方向性を述べるものである。

なお、看護モデルと理論を区別すべきとする看護理論家 Faucett と全てを理論とまとめる理論家 Meleis もあり、本稿では定説である後者を用いた。

II. 看護理論 (nursing theory) とは

まず、理論とは何かの定義は数多くある。広辞苑によれば、理論とは、「科学における個々の事実や認識を統一的に説明し、予測することのできる普遍性を持つ体系的知識である」とある。この中には事実や認識を説明し予測できる普遍的な性質、つまりすべての場合に通じる体系的知識だということである。

1) 聖泉大学大学院 看護学研究科 Graduate School of Nursing, Seisen University

2) 聖泉大学 看護学部 看護学科 School of Nursing, Seisen University

* E-mail Jougah-h@seisen.ac.jp

Kerlinger (1964) は、理論とは「相互に関連する概念、定義、命題の1つの組み合わせであり、現象についての変数間の関係を設定する。このことによって体系的な見方を提示する。それは、その現象を説明したり予測したりする目的のために行われる」とした。つまり、理論とは概念を有し、それらは相互に関連し合って命題を構成しており、ある現象を体系的に見る見方を示すものであるというのである。

また、Walker & Avant (2005) は、「ある現象に関する系統的な見解を表し、記述や説明、予測し指示または統制に役立つような本質的に一貫した一連の関係陳述である」と述べている。

このようにみると Wilson (1970) は、理論の目的は次の3点であると述べている。

1. 既存の知識を要約し記述し説明する（記述・説明）
2. 出来事、事実、現象を説明する（説明）
3. 将来起こりうる事柄を予測する（予測）

では、理論はどのような要素で構成されているのであろうか。

まず理論の中心となるのは、概念（concept）である。概念はある事象をとらえる考え方を簡潔に表現したものである。さらに、理論には前提（assumption）と概念と概念の関係を示す命題（proposition）がある。この前提、概念、命題は理論の構成要素であり、これらを知ることによってその理論をより理解しやすくなるものである。

さらに、Meleis (2012) は、「看護理論とは、看護の本質におけるある状況の概念化である。現象を描いたり、現象間の関係を説明したり、または看護ケアを規定する」ものであると述べている。つまり、看護理論は、看護に対する見方や考え方を体系的に理論づけたもので、看護理論の説明、記述、予測をもつものである。これは我々のとらえ方と合致するものである。

また、臨床や教育、管理、研究分野においても活用され成果を得るうえで重要なものである。このような活用が看護学を学問として確立していく上においてきわめて重要な位置を占めるものである。

Ⅲ. 看護理論の範囲（レベル）

看護理論の分類は、その理論の抽象度、哲学、

看護理論などの用語を用いるなどさまざまである。多くの看護理論家は、抽象度に応じて分類し活用している。本稿も多くの理論家が支持する広範囲理論、中範囲理論、小範囲理論（実践理論）の3区分に従って次に述べる。

1. 広範囲理論（大理論）（grand theories）

理論のなかで、最も抽象度が高く、大理論や一般理論ともいわれる。看護全般の広い範囲における理論である。普遍性は高く、即実践に活用することが難しい理論である。Walker & Avant (2005) の分類によれば、この広範囲理論には Peplau, Wiedenbach, Rogers, King 等の理論がある。

2. 中範囲理論（middlie range theories）

看護の各領域や専門性を扱った看護実践につながる理論で、抽象と具体の中間に位置する理論である。従って限られた範囲を扱うために抽象度は低く、具体性があり、概念を見い出したり、看護実践に活用できる理論である。この理論の範囲を Walker & Avant は、Pender によるヘルスプロモーション理論や Jonsson の「行動システム理論」等を挙げている。

3. 小範囲理論（実践理論）

特定の看護問題を扱った理論である。特別な看護理論や看護実践の場を限定したり、目標達成に必要な行為といった具体的なもので痛みの理論などがある。

Ⅳ. 看護のメタパラダイム

メタパラダイム（metaparadigm）とは、ある専門を体系化するための概念的枠組みのことである。看護学のメタパラダイムは、4つの中心概念、すなわち「人間」、「環境」、「健康」および「看護」である（Donaldson & Crowley, 1978）。これらの概念は、次のように定義づけられている。

「人間」（human beings）は、個人、家族、コミュニティ、あるいは他のグループを含めた看護の受け手であり、身体的、精神的、社会的な存在である。

「環境」（environment）は、その人を取り巻く状況と影響を及ぼすあらゆるものをさしている。

「健康」（health）は、人間が生まれてから死に

至るまでのプロセスで、受け手のよい状態をさしている。

「看護」(nursing)は、受け手に代わってあるいは人々とともに看護師が行う活動を意味している。つまり、看護は人間を取り巻く環境と絶えず相互作用を繰り返していることを十分理解して、人間の生から死に至るプロセスにおいて健康にかかわりをもっていくことである。

「人間」、「健康」、「環境」、「看護」の4つの主要概念を看護理論の焦点別に、ニーズ/問題指向、相互作用指向、システム指向、エネルギー分野指向に4区分できる。

- ・ニーズ/問題指向の理論は、対象の持つニーズに焦点を当てて看護理論を展開することを探求するものである。
- ・相互作用指向の理論は、対象のニーズ充足のために患者、家族間のコミュニケーション過程に焦点を当てるものである。
- ・システム理論は、人間は多くの部分から成り立っており、それらを統合すると総和以上になるというものである。
- ・エネルギー分野の理論は、人間はエネルギー分野で環境とたえず相互作用をしているというものである。

この分類の各区分に属すると考えられる代表的な理論家およびメタパラダイムは表1の通りである。

V. 看護理論の発展過程と状況

看護は、その時代を生きた人々の健康のニーズや社会的な要請を受けて変化し発展して今日に至った長い歴史をもっている。

看護理論もまた、看護理論家たちの生きた時代の情勢や思想の影響を受けながら、社会的要請や人々のニーズなどから、さまざまな理論が開発され、今日に至っている。

本稿では、看護理論の祖といわれる Nightingale をはじめその後、米国で開発され発展した看護理論を中心に日本、英国などで発表された看護理論を含めて、看護理論の歴史と看護の状況を概観したい。

1. 1859年～1880年代

職業としての看護は Nightingale によって始まった。1859年に出版された Notes on Nursing-What it is and What it is not (看護覚え書)は、環境を切り口に書かれた看護の本質論ともいえるもので、これが看護理論の始まりといわれ、その

表1 主な看護理論家による看護のメタパラダイム

焦点	看護理論家名	理論の内容	人間	環境	健康	看護
ニーズ/問題	Henderson.V	・看護の基本となるもの ・14の基本的ニーズの充足を助けることおよび看護の独自の機能について論じた	・14の基本的ニーズを持ち、必要なだけの体力、意志力、知識を持って自立していける存在である	・特に定義づけられていないものの、ニーズの充足に影響を及ぼすものであることが分かる	・必要なだけの体力、意志力、知識があつて、自力で基本的ニーズを満たすことができる状態	・すべての人々が基本的ニーズを充足し自立(あるいは安らかな死)できるように援助すること
	Adam.E	・看護の概念モデル ・患者が14の基本的ニーズを自分で満たすための能力の維持・回復に対する看護師の役割を論じた	・基本的ニーズを持つ複雑な統一体である	・特に定められていないが、基本的ニーズの1つに入れている	・特に定義づけられていない	・対象の体力、知識、意思を補う役割がある
相互作用	Travelbee.J	・人間対人間の看護 ・看護師と患者の相互作用について述べている	・絶えず発展しながら変化していく存在である	・特に定義はないが対象の状態や人生の経験を含んでいるものと思われる	・病気がない状態	・病気の予防、または病気に対処するためにその人を助けることである
	Barnard.K	・親子の相互作用モデル ・親子間は相互の特性によって影響される相互システムモデルである	・聴覚・視覚・触覚からの刺激から意味あるイメージをする能力を持つ	・人間の体験する全てのものである	・特に記述されていない	・健康上の問題を持つ人の反応の診断と治療である
システム	King.I.M	・健康維持・回復のために看護師と患者の相互行為を行う過程の要素を明らかにした	・環境と交流する開放システムである	・特に定義づけられていない	・人間のダイナミックな人生体験である	・看護師と患者の知覚した情報を共有し合う一連の過程である
	Newman.B	・ニューマンのシステム・モデル ・健康に対するストレスの影響を扱っている	・クライアント/クライアントシステム ・人間は1つの開放システムである	・ある状況における人間を取り巻く内的・外的な作用	・良好な状態あるいはシステムの安定性である	・人間・家族・集団・社会を助け、良好な状態を達成することである
エネルギー分野	Rogers.M.E	・人間と環境の相互作用を対象とした人間科学 ・ユニタリ・ヒューマン・ピーインクス	・独自のパターンをもった組織化されたエネルギーの場 ・人間は統一体で部分の総和ではなく、それ以上のものである	・四次元のエネルギーの場 ・開放型システムである ・人間と環境は統一体であり、無限のエネルギーの場を含んでいる	・良好な状態である ・社会によって規定される価値である	・看護は科学でありアートである ・統一された人間が環境との相互作用により発達するものである
	Parse.R.R	・人間生成理論	・人間は部分の総和ではなく、それ以上のものである ・開放的な存在である ・常に環境と相互作用している	・宇宙と表現 ・人間を補定とともに進化するもの	・「生成」と表現 ・人間と環境との相互作用から発生する律動的なプロセス	・人間科学である ・知識のすべてを用いて人間に奉仕するための技術である。

後の理論の開発や発展に大きな影響を与えた。

他方、米国で正規の看護専門学校（Diploma）として認められているのは、1978年開設のニューイングランド母子病院附属看護専門学校である。その後ニューヨーク、ベルビュー病院附属看護専門学校、コネチカットニューヘブン病院附属看護専門学校、ボストンマサチューセッツ総合病院附属看護専門学校の3校で新しい看護教育が開始されたが、看護理論の発表はみられなかった。

2. 1890年代～1900年代

この時代になると細菌学の発展で病気の治療や消毒法なども発展していった。米国では訪問看護事業が始まった。

看護の領域では、全米看護連盟（National league for Nursing, 1895）の前身である組織や米国看護協会（American Nursing Association, 1896）の前身の組織が設立された。また、国際的な専門職能団体である国際看護協会（International Council Nurse, 1899）も設立されている。

この時代では公衆衛生活動の始まりと職能団体の設立は特記に値するが看護理論に関するものはみられなかった。

3. 1900年代～1910年代

米国では、Nuttingが1912年にナッティング・レポートを発表した。

また、大学における看護教育として1909年ミネソタ大学と1917年にコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジでの教育も始まった。

この時代で特筆すべきことは1910年、Flexnerによる専門職の定義の発表で、専門職をめざす看護師にとって大きな影響を与えた。

また、Nuttingが1960年看護専門誌（American journal of Nursing）を創刊したことも看護が専門職をめざす上で大きな力となった。

4. 1920年代～1930年代

この時代の米国は、戦争による看護教育の質の低下が著しく、改善するための方策がとられた。「ゴールドマークレポート（Goldmark report）」（1923）の発表や、1924年にコロンビア大学ティーチャーズ・カレッジに初の博士課程が開設されたことも特筆すべきことである。

Nutting & Dock（1907）による「看護の歴史」の編纂、Harmmarによる「看護の定義」の発表などがあった。

看護理論は、ようやくその芽がふきはじめた時代となった。

5. 1940年代～1950年代

米国は、再三の世界大戦による看護の質の低下が著しかった。1948年社会学者Brownによる「ブラウンレポート」が発表され看護学校の病院からの独立、看護教育の質の向上などが規定された。

HarmmarとHendersonは「看護の原理と実際」で看護の定義づけを行った。

6. 1960年代～1970年代

この時代になると米国では多くの看護理論が開発され発表されるようになった。この年代に出版された主な理論家と理論は表2の通りである。

看護理論の構築の領域も確実に変化しつつあることが伺える。

米国のこの時代は、理論の焦点が問題志向型で看護の役割・機能が中心であったものから患者と

表2 1960～1970年に出版された主要理論家と理論

理論家名	出版年	著作名
Henderson.V	1960	看護の基本となるもの
Abdella.F. G	1960	患者中心の看護
Orlando.I.J	1961	看護の探求
Lydia.E,Hall	1963	コア・ケア・キュアモデル
Wiedenbach.E	1964	臨床看護の本質
Travelbee.J	1966	人間対人間の看護
Levine.M	1967	看護の4つの保存モデル
King.I.M	1971	看護の理論化－人間行動の普遍的概念
Petersoon& Derad	1974	ヒューマンスティックナーシング（人間的な看護）
薄井坦子	1974	科学的看護論
Roy.S.C	1976	ロイ看護論：適応モデル

看護者の関係（相互作用）に移っていったが、これは、看護を結果ではなく過程（プロセス）で捉える発想である。日本では、1960年代は米国で開発された看護理論が翻訳出版された意義ある年代である。また、看護者自身が「看護とは何か」と看護の本質を問う時代になったのである。

1970年代に川島みどり（1973）「ともに考える看護論」、薄井坦子（1974）「科学的看護論」の日本人の理論家による理論が登場したことは、特筆すべきことである。また、林滋子ら（1976）による看護の定義と概念の解説書が出版された。

また、看護系出版社である現代社の総合看護誌編集部やメヂカルフレンド社編集部による初の看護に関する出版が続いたこともこの年代の特徴である。現代社の出版は1967年「看護の本質」、1973年「患者の理解」、1974年「看護の研究」の翻訳論文集であり、メヂカルフレンド社からは1970年に「現代看護論集」が出版されている。

7. 1980年代～1990年代

この年代も数多くの看護理論家による理論が発表された。また、この時代は、既に発表された理論の修正や改訂・再版がなされたことも特徴の1つである。

1980年代の米国では、看護理論の具体的なテーマも従来の問題解決や適応あるいはストレス・

コーピングなどから開放システム、意識の進化などに変わってきた。

他方、日本では、1981年日本看護科学学会が発足し、日本看護科学学会誌が発刊され、看護研究の発展に寄与した。

1990年代は、米国ではある特定の看護領域における看護実践に活用するための中範囲理論の開発がされた。Mishelの「不確かさの理論」、Kolcabaの「コンフォート理論」、Resnickの「自己効力理論」およびReedの「自己超越理論」などがある。

他方この1990年代では日本の看護理論に関わる領域はどのようになっていたのだろうか。まず、看護理論家国際会議が開催され、国際的な視野から看護理論の検討や研究、実践が行なわれる年代になった。

この年代の主な看護理論は表3の通りである。

この時代の日本では、1991年Tomey & Alligoodによる「看護理論家とその業績」が医学書院より出版された。また、池川清子と久間圭子による看護理論が発表された。このうち久間による理論は日本の看護論として比較文化的考察を加えたもので、日本の文化、価値の違いを焦点にした看護理論である。

8. 2000年代～2010年代

2000年代に入った米国では、知のパターンの開

表3 1980年代～1990年代に出版された主な看護理論（著作）

理論家名	出版年	著作名
Johnson.D.E	1980	看護のための行動モデル
Adam.E	1980	看護師であるということ
Parse.R.R	1981	健康を－生きる－人間 パースイ看護理論
Roy.S.C	1981	ロイ看護論－適応モデル序説
Newman.B.	1982	ベティ、ニューマンのシステムモデル
Barnard.K.	1983	親子相互作用モデル
Benner.P	1984	初心者から達人へ－臨床看護実践における卓越性とパワー
野島良子	1984	看護論
Mercer.R.T	1985	母親役割の変遷
Newman.MA	1986	健康のモデル
Watson.J	1988	ワトソン看護論－人間科学とヒューマンケア
Benner.P.	1989	現象学的人間論と看護
池川清子	1991	看護－生きられる世界の実践知
Leininger. M.M	1991	レイニンガー看護論
Adam.E	1991	アダム看護論
Newman.MA	1994	マーガレットニューマン看護論 －拡張する意識としての健康
Benner.P	1994	解釈的現象学 －健康と病気における身体性・ケアリング・倫理
Pender.N.J	1996	ヘルスプロモーション看護論
久間圭子	1998	日本の看護論－比較文化的考察

発が行われた。

また、英国のエジンバラ大学看護学部の教員であった Roper らによる「ローパー、ローガン、ティアニー看護モデル-生活行為に基づくイギリスの看護」の出版は英国初で特筆すべきことである。

他方、日本では2000年に入って学会で海外の看護理論家を招聘する機会が多くなり、日本の看護者にとって米国の著名な看護理論家から直接、講演を聞く機会となった。

また、逆に米国に留学し看護理論家から直接学ぶ者も増加し、今や看護理論は翻訳書を通して学ぶという見方を経て直接理論家より学ぶ機会が増え国際化の年代に入ったといえそうである。

こうして、難しい、わからないと避けてきた看護職者にとって看護理論は身近な存在になりつつある。

この年代2002年、樋口康子による「看護学-知

へのあくなき探求」や竹尾恵子監修による「超入門、事例で学ぶ看護理論」、筒井真優美の2008年、「看護理論-看護理論20の理解と実践への応用」及び城ヶ端初子による2000年「やさしい看護理論」など看護理論の解説本が出版され、解説本の急増は看護基礎教育や大学院における看護理論の導入の増加とも関連しているものと思われる。

以上看護理論の発展過程を1859年～2010年まで概観しその時代の看護の動きも併せてみてきた。

この理論発展過程の中でみえてきたことを次にまとめた。

- 1) Nightingale の「看護覚え書」にみる看護思想は、後の看護理論の源となったと同時に看護理論発展の大きな原動力となったこと
- 2) 1920年代には米国では看護理論の兆があらわれてきたこと
- 3) 米国では後に大学、大学院の卒業生達が独自

表4 テーマ別にみた看護理論の推移

年代	出版年	看護理論家と著作・モデル	ニード/問題	システム	相互作用	エネルギー分野	ケアリング	現象学
1859年代	1859	Nightingale F 「看護覚え書」	←→					
1950年代	1952	Peplau H.E 「人間関係の看護論」			←→			
1960年代	1960	Henderson V 「看護の基本となるもの」	←→					
	1960	Abdellah F.G 「患者中心の看護」	←→					
	1961	Orlando I.J 「看護の探求」			←→			
	1962	Hall L 「コア・ケア・キュアモデル」	←→		←→			
	1964	Wiedenbach E 「臨床看護の本質」			←→			
1970年代	1970	Rogers M.E 「ロジャーズ看護論」		←→		←→		
	1971	Orem D. E 「オレムのセルフケア不足理論」		←→				
	1971	King I. M 「目標達成理論」		←→				
	1971	Travelbee J 「人間対人間の看護」			←→			
	1974	Newman B 「ニューマン・システムモデル」		←→				
	1976	Roy S. C 「ロイ看護論」		←→				
	1978	Leininger M. M 「レイニンガー看護論」					←→	
	1979	Watson J 「看護・ケアリングの哲学と科学」					←→	

の看護理論を発表したことや、米国政府から助成金を受けた人々が看護理論を発表して理論発展に貢献したこと

- 4) 日本が米国で開発された看護理論を翻訳したのは1960年代に入ってからである。この年代の米国では、多くの看護理論が次々と発表された時代である。代表的なものには、「看護の基本となるもの」、「看護論」、「患者中心の看護」、「看護の探求」などがある。日本の1960年代は、看護界全体としての看護理論や看護の本質に関する機運が湧き上がったと考えられる。
- 5) 米国では看護理論のテーマも時代とともに変化していった。また、既に発表された理論の改訂、再版も1980年代になって盛んに行われた。
- 6) 日本では1970年代～1980年代には、薄井坦子(1974)、野島良子(1984)らによる看護理論が出版された。他にも看護理論の紹介を川島みど

り(1973)やある概念をまとめたもの(林滋子, 1976)や看護理論にかかわるもの(小林富美栄, 1981)、看護理論集(看護理論検討グループ, 1982)、その他が次々と出版された。

- 7) 2000年代に入ってからには英国で開発された看護理論が出版され、わが国でも翻訳出版された「ローパー・ローガン・ティアニー看護モデル, 2005」。

VI. テーマからみた看護理論の推移

テーマ別にみた理論の推移は表4の通りである。

看護理論のテーマから全体をみると、1860年代半ばから1960年半ばにかけてはニードが強調されているのが分かる。1970年代ではシステムに焦点がうつり、相互作用は各年代に取り上げられてい

年代	出版年	看護理論家と著作・モデル	ニード/問題	システム	相互作用	エネルギー分野	ケアリング	現象学
1980年代	1981	Parse, R. R 「健康を生きる一人間 ーパースイ看護理論ー」						←→
	1984	Benner, P 「ベナー看護論」					←→	
	1986	Newman, M. A 「健康のモデル」					←→	
	1988	Watson, J 「ワトソン看護論ー ヒューマンケアリングの科学」					←→	
1990年代	1991	Adam, E 「看護のための概念モデル」	←→					
	1992	Leiniger, M. M 「レイニガー看護論 ー文化ケアの多様性と普遍性ー」					←→	
	1994	Newman, M.A 「マーガレット・ニューマン看護論 ー拡張する意識としての健康の理論」					←→	
	1995	Newman, B. H 「ベティ・ニューマンのシステムモ		←→				
	1996	Pender, N.J 「ヘルスプロモーション・モデル」			←→			
2000年代	2000	Roper, N } (ローパー,ローガン Rogan, W } ティアニー) Tierney, A. J } 「ローパー, ローガン, ティアニー 看護モデルー生活行為に基づく イギリスの看護」	←→					
	2001	boykim, A & Schoenhofer 「ケアリングとしての看護ー新しい 実践のためのモデル」					←→	
	2003	Kolcaba, K 「コンフォート理論」			←→			

る。エネルギー分野では特に年代を問わずみられている。1980年代ではケア・ケアリングに関するテーマの増加がみられる。1990年以降は、看護理論を紹介した書籍や看護理論とは何かを問うもの、看護理論分析や評価、理論開発過程や理論構築といった広範囲なものも多く、従来よく用いられてきたニーズ／問題、相互作用、システム、エネルギー分野の4分類にはおさまりきれない多様さである。

VII. 看護理論の動向

看護理論の状況を1. 看護理論の範囲(レベル)、2. 看護のメタパラダイム、3. 看護理論のテーマの推移、4. 看護理論の活用の4つの視点から述べたい。

1. 看護理論の範囲(レベル)から

看護理論は、その示す範囲の大きさにより3区分できる。大理論、中範囲理論および小範囲理論であることは前述した。

これらの理論の中では、中範囲理論が臨床、研究、教育等の領域で活用しやすいので現在広く使われている。小範囲理論も臨床場面では部分的に使われる理論であるので、特に臨床では今後の理論の開発と活用を期待したい。

2. 看護のメタパラダイムから

看護のメタパラダイムは「人間」「環境」「健康」「看護」の4概念で構成されている。この決定に至るまでには、多くの議論がなされた。1989年、アメリカで開催されたウイングスプレッド会議で看護の主要概念のうち「看護」を「ケアリング」に置き換えるか否かの議論がなされた。

しかし、結局、ケア、ケアリングは多くの専門職の学問の一部になっており、それらの職業に共通するのであれば、看護学でケア、ケアリングの知識を発展させても、看護学に独自なものにはなり得ないといえるということで否決され「看護」として残った。

3. 看護理論のテーマの推移から

看護理論のテーマ(焦点)は、その時代の背景と関連しながら、変化して今日に至っている。1950年代は主として人間のもつニーズに着目し、

そのニーズを自分で満たせない人に対して、いかにニーズ充足を図るのか検証され、実践に活用されてきた。

また同時に、看護とは何か、看護独自の機能とは何かといった本質的な部分に関心が高まり、多くの看護職者は、臨床や教育の場で真剣に議論し高め合った。その後、1960年代になると、患者-看護者関係のように、人間対人間の相互の関わり合いが焦点とした理論が主流を占めるようになった。さらに1970年代になると、パーソナルコンピュータが身近なものになり、システム論が登場してきた。この理論は、人間を1つの開放システムと捉えるものである。

1980年代では、ケア、ケアリング、あるいは臨床学的な見方に焦点を当てた理論が登場してきた。これは、ケア、ケアリングを見直す社会の風潮があり、その影響も大きかったと思われる。

1990年代以降は、癒しや健康増進に関するもの、文化人類学的(民族学的)な発想による看護理論など従来にない視点からみた理論が増加している。

4. 看護理論の活用から

臨床における看護理論の活用は、わが国では、活発に行われているとはいえない現状である。しかし、ここ数年来、看護理論を導入して看護展開を行っている病院は増加傾向にある。

看護教育領域では、看護基礎教育で既に看護理論の1部は教授されているものの今後、看護理論の教育内容と方法にさらなる検討が必要と思うものである。

研究では、看護理論を活用した研究発表も増加傾向にある。ただ臨床の看護過程を用いた研究で、看護理論の1部分を抜粋して事例に当てはめるような形での活用は、望ましくないとと思われる。

このようにさまざまな問題を抱えつつも、看護理論開発は続いており、臨床、教育、研究に活用されていくものと思われる。

VIII. 展 望

1. 看護理論の必要性(重要性)の高まり

看護理論は実践の基礎となるものであり、理論なくして実践はあり得ない。看護理論の活用によって、看護ケアの質の向上とともに看護職者自

身の専門性をより一層高め、予測をもった看護の展開が可能になる。

このようにみると看護理論は、今後ますます必要性（重要性）は高まっていくものと思われる。

2. 日本文化、価値に根ざした看護理論の構築への期待

我々は、米国で開発された理論書の翻訳で学習し、それを臨床や教育に活用してきた歴史がある。

しかし、米国で誕生した理論は、その国の人々を通して検証したものであり、文化や価値観が異なれば必ずしも患者に適合した理論とはなりにくい側面がある。看護理論の主要概念が理解できなければ、理論そのものがわからないと遠ざけられてしまう傾向もあるように思う。従って、これからは日本文化、価値観、生活様式などを含めて日本文化に根ざした看護理論の構築が望まれるところである。

3. 看護理論の実証・修正・統合に向けて

看護理論も1980年代に入ると改訂、再版される時を迎えた。理論開発には長い時間を要する。開発された理論はその後活用されながらさまざまな問題や課題に対処しつつ修正されていくのである。このような現象は、新しい看護理論の構築とともに今後も続いていくものであると考えられる。

4. 看護理論の教育内容と方法の構築を求めて

現在看護理論は、看護基礎教育機関および大学院で授業が展開されている。基礎教育ではNightingaleやHendersonの理論を教授しているところが多い。しかし、看護理論がどのような目的で何をどのように教えるかという教育内容と方法論の確立を急がねばならないと思う。

また、大学院（修士課程、博士課程）においては、高度看護実践者や研究者を育成することに鑑み、何をどこまで教えるのか、研究するのか等のコンセンサスが必要となろう。

看護理論を実践や研究、教育領域に活用するために抜本的な計画と実践が求められていると思われる。

5. 看護実践に活用できる中範囲理論の開発を

中範囲理論は、抽象度が低く具体性があることから、臨床において活用しやすい理論で、多くの病院で活用されている。また、教育や研究の場でも、看護理論活用がなされており、学会や研修会などでも、事例や方法論が多くとりあげられている。この状況からみて、臨床・教育・研究場面で有効と思われる中範囲理論は今後、一層活用が予測できると同時に新しい中範囲理論の開発も促進される必要があると思われる。

6. 看護理論の臨床・教育・研究領域における活用を

理論活用を促進し、看護の評価や活用理論の評価ができる体制作りをする必要がある。現在、看護理論を活用していない臨床や研究の場も存在している。看護理論の目的、重要性、活用の可否によって生じる成果の違いなどを考え合わせると看護や看護専門職の意識の向上のためにも、有用となり得る看護理論を採用し、理論に根差した看護・教育・研究が促進していくことを各領域の看護職者に期待したい。また、看護評価をはじめ、看護研究・看護教育の評価および活用した理論の評価などが実施されることを望むものである。

IX. 本研究を通して見えてきたこと

本研究を通して看護理論の発展過程を振り返り、現状を知り、問題点や課題について次のようにとらえた。また、本研究の限界についても検討した。

看護理論はNightingaleを祖として生まれ、1960年代の米国で開発が進み、多くの看護理論が発表された。日本では、米国で開発された理論が翻訳で紹介され導入されてきた。その後、日本および英国の看護理論家により開発された理論が発表され今日に至っている。その間、看護理論は、理論家達の生きた時代の情勢や思想の影響を受けながら社会的要請や人々のニーズなどから、多くの理論が開発され、臨床はじめ看護教育や研究領域で活用されてきたことが理解できた。

しかし、他方で主に米国で開発された理論は、50年余を経た今日、さまざまな問題や課題を持つ現状が見えてきた。

問題としては、看護理論に対する看護職者の意識である。看護理論は難しいや活用方法が分からない等看護理論の苦手意識が今もおお根強く残っていることである。

さらに、臨床では、看護理論を実践に活用していない施設も多く存在し、導入している施設でも十分に活用できていないとする所もかなりある状況である。

看護教育領域では、多くの看護系大学や大学院で看護理論の教育が実施されているが、教育内容や方法に関しては各校ごとに各々教授されている状況にある。

看護研究領域では、看護理論活用による研究は増えているものの臨床における研究で適切と思えない活用も存在する。

こうした現状から臨床、教育、研究領域における看護理論はさらに検討を重ねコンセンサスを得ていく必要があると考えている。

また、今後の課題として、次の3点の検討とコンセンサスを得る必要性があると考えている。

1つは、看護学のメタパラダイムである「人間」「健康」「環境」「看護」の4つの主要概念は、本論であげたように「看護」をケアリングに置き換えられないかの議論にみられるように、今後これらの概念はさらに議論され変更、修正の可能性もあること。

2つ目は、理論の範囲（レベル）は、看護理論家によって、大理論と中範囲理論の分類が異なる点もあることから、今後検討の余地が残されていること。

3つ目は、わが国は主に米国で開発された理論を活用してきたが、実情に合わない点もあり、今後日本の文化、生活様式、価値観などを考慮にいられた理論の開発が望まれること。

尚、本研究の限界は、日本の看護理論の臨床活用および看護教育機関や看護継続期間ならびに院内教育で、どのような教育内容や方法をとっているかの実際は、文献によるものである点である。

今後看護理論の臨床活用や教育内容、方法等の実態調査の実施計画があるので、この調査結果を得て、本研究をさらに深めていきたいと考えている。

X. おわりに

看護理論の発展過程と動向を概観し、現在の状況を検討し、これからの看護理論について述べた。看護理論は、実践の基になるものであるから、今後一層臨床で活用されることで、質の高いケアの提供が可能になっていくものと思われる。また、教育の場では看護理論の位置づけを明確にして、対象の学生達に適合した看護理論の教育がなされることによって、ますます理論と実践を関連付けて使える看護職者の育成につながるように思われる。さらに、研究の場においても、活発な理論研究が期待できるのではなかろうか。

最後に、我々は日本における看護理論開発がより一層発展することを期待するものである。特に、日本の文化に根ざした看護理論の開発がなされ、その看護理論が臨床で活用され、教育の場でも教育・研究される社会になることを期待するのである。

文 献

- Abdellah, F. G. Beland, I. L. Martin, A. & Matheney, R. V (1960) / 千野静香訳 (1963), 患者中心の看護, 医学書院, 東京.
- Alligood, M. R. (2014) : Nursing Theorists and Their Work (8th ed), Elsevier.
- Benner, P & Wrubel, J. (1989) / 難波卓志 (1999) : ベナー / ルーベル, 現象学的人間論と看護, 医学書院, 東京.
- Brown, E. L. (1948) / 小林富美栄 (1966), ブラウンレポート—これからの看護—, 日本看護協会出版会, 東京.
- Chinn, P. L. & Kramer, M. K. (1995) / 白石聡監訳 (1997), 看護理論とは何か, 医学書院, 東京.
- Damus, K. (1980) / 兼松百合子, 小島操子監訳 (1985), 看護モデル—その解説と応用—ジョンソン行動モデルの応用—, 日本看護協会出版会, 東京.
- Donaldson, S. K & Crowley, D. M. (1978) : The discipline of Nursing, Nursing Outlook, 26 (2), 113-120.
- Fawcett J. (1995) : Analysis and Evaluation of Conceptual Models of Nursing. (3rd ed). Philadelphia, PA. : F. A. Davis Company.
- Freese, B. T. / 近田敬子, 奥野信行 (2002), ベティ・

- ニューマンのシステムモデル, In A. M. Tomey, & M. R. Allgood (Eds.) / 都留伸子監訳 (2004), 看護理論家とその業績, 第3版, 医学書院, 東京.
- Gold mark, J (1923) : Nursing and Nursing Education in the United States. New York, Macmillan.
- Henderson, V. (1966) / 湯槇ます, 児玉香津子 (1967), 看護論, 日本看護協会出版会, 東京.
- Henderson, V. (1969) / 湯槇ます, 小玉香津子訳 (1995) : 看護の基本となるもの, 日本看護協会出版会, 東京.
- 林滋子代表編集 (1976) : 看護の定義と概要, 日本看護協会出版会, 東京.
- 池川清子 (1991) : 看護—生きられる世界の実践知, ゆみる出版, 東京.
- 城ヶ端初子 (2000) : やさしい看護理論, メディカ出版, 大阪.
- 城ヶ端初子, 樋口京子 (2007) : 看護理論の変遷と現状および展望, 大阪市立大学看護学部紀要, 3, 1-11
- Kay Kittrell Chitty (1997) : Chapter 6, Defining Profession, in Professional Nursing Concepts and Challenges, 2nd ed), W. B. Saunders.
- 久間圭子 (1998) : 日本の看護論—比較文化的考察, 日本看護協会出版会, 東京.
- Kerlinger, F. N (1964) : Foundations of Behavioral Research, New York. Halo. Rinehart & winstom.
- 川島みどり (1973) : とともに考える看護論, 医学書院, 東京.
- 小林富美栄, 樋口康子, 小玉香津子 (1981) : 現代看護の探求者たち, 日本看護協会出版会, 東京.
- Leininger, M (Ed) (1991) / 稲岡文昭監訳 (1995), レイニンガー看護論—文化ケアの多様性と普遍性, 医学書院, 東京.
- Levine, M. E. (1967a) : The four conservation principles of nursing, Nursing Forum. 6.
- Levine, M. E. (1967b) : For lack of love alone. Minnesota Nursing Accent, 39, 179.
- Meleis, A I. (2012) : Theoretical Nursing : Development and Progress. (5th ed). Philadelphia: Lippincott Williams & Wilkins.
- 南裕子 (1986) : 看護とコミュニケーション 看護Mook17, 金原出版, 東京.
- Mercer. R. T. (1985) : The process of maternal role attainment over the first year. Nursing Research, 34 (4), 198-204.
- Mishel, M. H. (1988) : Uncertainty in Illness, Image, 20 (4), 225-232.
- Neuman, B. (1974) : The Betty Neuman Health-Care Systems Model : a Total Person Approach to Patients Problems. In J. P. Riehl, & C. Roy (Eds), Conceptual Models for Nursing Practice (2nd ed). New York, Applcton-Century-Crofts.
- Newman, M, A. (1986) : Health as Expanding consciousness, St, louis, MO : C. V. Mosby.
- Newman, M, A. (1994) / 手島恵訳 (1995), マーガレット・ニューマン看護論—拡張する意識としての健康の理論, 医学書院, 東京.
- Nightingale, F. (1859) / 小玉香津子, 尾田葉子翻訳 (1997), ノート・オン・ナーシング—本当の看護とそうでない看護, 日本看護協会出版会, 東京.
- Neuman. B. (1995) / 野口多恵子, 河野研二, 塚原正人訳 (1999), ベティ・ニューマン看護論, 23, 医学書院, 東京.
- Nutting, M. A, & Dock, L. L, (1907) : A History of Nursing: The Evolution of Nursing Systems from the Earliest times to the Foundation of the First English and American Training Schools for Nurses. New York : G. P. Putnam's Sons.
- 野島良子 (1984) : 看護論 : ヘルス出版, 東京.
- Parse, R, R, (1981) / 高橋照子訳 (1985) : 健康を一生生きる—人間—パーシィ看護理論. 現代社, 東京.
- Pender, N, J. (1996) / 小西恵美子監訳 (1997), ペンダーヘルスプロモーション看護論. 日本看護協会出版会, 東京.
- Roy. C. (1976) / 松木光子監訳 (1981), ロイ看護論, 適応モデル序説, メヂカルフレンド社, 東京.
- Roper, N. Logan, W. & Tierney, A (1996) : The Roper-Logan-Tierney model: A model in nursing practice. In P. Hinton-Walker & B. Newman (Eds), Blueprint for use of nursing models, New York: National League for Nursing Press.
- 新村出 (1998) : 広辞苑, 第5版, 岩波書店, 東京.
- 竹尾恵子監修 (2000) : 超入門, 事例で学ぶ看護理論, 学習研究社, 東京.
- 筒井真優美編集 (2008) : 看護理論—看護理論20の理論と実践への応用, 南江堂, 東京.
- 筒井真優美編集 (2015) : 看護理論家の業績と理論評価, 医学書院, 東京.
- 薄井坦子 (1974) : 科学的看護論, 日本看護協会出版会, 東京.

- Watson, J. (1988)／稲岡文昭, 稲岡光子訳 (1992), ワトソン看護論—人間科学とヒューマンケア, 医学書院, 東京.
- Walker, L. O, & Avant, K. C. (2005)／中木高夫, 川崎修一訳 (2008), 看護における理論構築の方法, 医学書院, 東京.
- Wiedenbach, E. (1964)／外口玉子, 池田明子訳 (1969): 臨床看護の本質—患者援助の技術, 現代社, 東京.
- Wilson H. S. (1970):理論とは何か, 看護研究, 3, (3) 148-174.
- Wooldridge, P, J, Schmitt, M, H, Skipper, J, KLeonard, R, C (1983)／南裕子監訳 (1990), 行動科学と看護理論, 医学書院, 東京.